



Title	高田衛著『春雨物語論』
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	日本文学. 2010, 59(7), p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48809
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高田 衛著

『春雨物語論』

飯 倉 洋 一

高田衛が蝶になつて険しく聳え立つ山の頂上付近を飛翔している。その山の名は『春雨物語』。山に魅せられて登ろうとした者は跡を絶たなかつたが、難路につぐ難路、登り始めたものにしか分からぬ困苦は、登頂挑戦を躊躇わせていた。

*

秋成没後二百年の二〇〇九年も暮れようとする頃、本書『春雨物語論』は上梓された。秋成の文学觀の最後のかたちであり、写本として残された諸本の總体であり、物語とは何かを切実に意識させてくれる反物語あるいは「物がたりざまのみねび」である。近世文学史上屈指の問題作『春雨物語』が、初めて本質的に、全般的に評論されたこと、そのことにおいて、本書は日本近世文学研究史上記憶されるべきである。

庄巻は本書のための書きおろし『春雨物語』の世界——内なる古代・内なる言葉へ——である。ここでは、『春雨物語』論の根本問題が、「いくつかの切口」で論じられている。たとえば「未完のトータリティ」という形での捉え方である。佐藤深雪の、國家という主題を空白のままにしているために、潜在的に未完結性をかかえることになつたという議論、風間誠史の、序文の末尾から冒頭へと循環する文章構造から、「無限に循環する構造」ゆえ『春雨物語』は完結しない物語だという説、それに対して、高田は、

ここ二十年ほどの『春雨物語』研究は、高度で閉ざされた議論を重ねてきた。諸本論と、それに密接に関わる成立過程論と、そして主題論と様式（あるいは非様式）論のアボリアである。つまり、どの道から登ろうとしても、急勾配で滑りやすい隘路を通らなければならない山が『春雨物語』であった。その頂上への登攀を試みること、つまり『春雨物語』をトータルに論じることは、この難路を知らない者には能天気な所業であり、この難路に苦しんだ者には暴挙

に近い危険行為である。八十歳になる高田衛がそれに挑んだ記録が本書である。

「老いからの飛翔」。これが本書のテーマである。秋成の『春雨物語』がそうであると同時に、高田衛の本書執筆の試みもまた「老いからの飛翔」であつた。表紙カバーの図案である蝶は、飛翔のイメージであるとともに、胡蝶の夢に絡んで夢想を意味しよう。春雨物語論は春雨物語逍遙でもあつた。高田は難路から飛翔して頂上を目指したのである。

本書は秋成没後二百年の節目に、秋成の全事跡をかつて辿つた研究者が取り組んだ文化五年本の批評であり、没後百五十年目の一九五九年に中村幸彦の提示した『春雨物語』の昭和異本（日本古典文学大系『上田秋成集』）に次ぐ、享受史上の重要なモニュメントといふことになるだろう。

庄巻は本書のための書きおろし『春雨物語』の世界——内なる古代・内なる言葉へ——である。ここでは、『春雨物語』論の根本問題が、「いくつかの切口」で論じられている。たとえば「未完のトータリティ」という形での捉え方である。佐藤深雪の、國家という主題を空白のままにしているために、潜在的に未完結性をかかえることになつたという議論、風間誠史の、序文の末尾から冒頭へと循環する文章構造から、「無限に循環する構造」ゆえ『春雨物語』は完結しない物語だという説、それに対して、高田は、

一話一話がそのストーリーを立ちあげるにふさわしい古語や雅語によつて、穴だらけのまま、ところによつては骨と皮だけであることを、意図的疾走のかたちと受けとりたく、そこに「未完成」といふ完成のかたちを見るのである。そうすると私には『春雨物語』が

生きて見えるのである。

と述べ、平城天皇と神野親王の対話の間にあらはす複雑な心理過程をわざと空白にして、「次の瞬間、「あした御國ゆづりの宣旨くる」と書く」「血かたびら」の語りを例にあげる。

松田修はかつて「血かたびら」批判をし、逐一その構造の破綻を指摘した。それに対して中村幸彦はただちに松田説に反論して、「血かたびら」に一点の破綻もないと言つてのけた。高田衛は言う。「松田修ならここに小説の破綻をいふだらう。「秋成、老いたり」と。私は答えるだらう。「いな飛翔せるのみ」と。」

つまり飛翔とは春雨物語の未完成性と関わる。それは「様式性を脱しようとする精神の運動」でもあり、登場人物の類型からの離脱でもあった。高田においてそれは佐藤深雪の「源氏物語」のあとに物語をつくることにはどんな意味があるか」の問いと関わるらしい。「源氏物語」の物語有効論や完結性に對して、「春雨物語」の未完性や物語懐疑論を向かい合わせるのがよいといふ。それが「老いた」からの飛翔だといふのである。しかし物語の範型に完結性をいうのはいかがであろうか。源氏物語中斷説の議論もあり、中世王朝物語が源氏物語の子供たちであり、宣長が源氏物語に不在の物語である「手枕」を書いたことを想起するならば、むしろ源氏物語こそ未完性を持ち、秋成の「物がたりざまのまねび」の対象にそれがあるのではないかといふ議論もありえよう。たとえば物語に特有の省筆の「まねび」も「春雨物語」には見られるのである。

個々の作品論の中では「目ひとつ」の神」と「折々草」の「一目龍」記事との関係の指摘や「撫噲」における「西遊記」の取り込みの細密な読解など、重要な提言もあるが、最も私を興奮させたのは、

「死首の咲顔」論である。

「死首の咲顔」の五歳はこれまで酷評されてきた。しかし高田の読みによれば、これは通い婚を型とした「物がたりざまのまねび」なのだという。高田はテクストを緻密に読み解いて、五歳と宗が男と女として結ばれており、母も兄もそれを「よき事に見ゆるし」でいるという。「ますらを物語」ではそういう設定はなかつたが、「死首の咲顔」では、五歳は意思をもつて宗のもとに通つており、事実上婚姻していた。だがこの「物がたりざまのまねび」は近世的家父長制と厳しく対立する。高田の解釈によれば、五歳の優柔不断な行動は全く搖らぎのない意思で貫かれてゐるということになる。すなはち優柔不斷と批判された五歳の行為は、「孝」をたててのち、「貞」を全うするもので、「他者の誤解を恐れず、信義の道を一筋に行こうとする男の道であつた」というのである。

基本的に本書は評論である。しかし、近年の論文を精力的に涉獵し、引用し、深読みしていく。本書に引用されることによつて、既読の論文が、私の印象と全く異なる相貌で立ち現われる驚きを何度も味わつた。先行文献からの飛翔である。

秋成は暗闇から光を取り戻してくれた神医谷川氏との出逢いを書いた。それがなければ「春雨物語」は成らなかつた。高田は「あとがき」で、ある名医との出逢いを人生の僥倖として書いた。それがなければ「春雨物語」は成らなかつた。秋成の老いに高田が自らの老いを重ねた時、高田には飛翔する秋成が見えた。それを描いたのが本書である。本書を横目に我々はなお難路を登り続けなければならぬだろう。